

二〇二三年六月二十四日（土）

担当 神塚淑子

I

【原文】

太平經鈔己部卷之六

今天下所畏、口閉爲（一）不敢妄譚。今日月星曆、親天之列宿神也、尚相畏。是故日出、星輒逃匿、不敢見、畏其威也。夫四境之內、有嚴帝王、天（二）驚（卅亥）（三）、雖（四）京師大遠、畏詔書不敢語也。一州界有強長吏、一州不敢語也。一郡有強長吏、一郡不敢語。一縣有剛強長吏、一縣不敢語。一閭（五）亭有亭長剛強、乃一亭部爲不敢語。此亭長、吏之小者、況其大者乎。皆恐見害、各取解免（六）而已。雖有善心意、不敢自達於上、使道斷絕。一家（七）尚親、自共血脉、同種類而生、乃相畏如此、況異世乎。自中古以來（八）、失道德、反多以威武相治、威相迫脅、有不聽者、後會大得其害、傷深（九）、流子孫（十）。下古尤甚。小有欲上書言事、自達帝王、比近探（十一）其命者輒殺之。不即時害傷、更相囑託而傷害之。故臣民悉結舌杜口爲暗、雖見愁冤、不得上達。故令帝王聰明絕也、天變日多、是明證効也。

今民親得生於父母、受命於天地、以天地爲父母。見災變善惡、是天地之譚語、欲有所言也。且（十二）尚皆畏見害（十三）、乃相教勅、共背（十四）皇天后土欲言、共蔽冤天地、乃使辭語不通、天地長懷悒悒而不達。今帝王雖神人（十五）之源、乃據（十六）百重之內、萬里之外。百重之內、人（十七）欲往通言、迫脅比進（十八）、不得往達也。

【校勘】

經…太平經卷之八十六（己部之一）「來善集三道文書訣一百二十七」（道藏八六・三a七行目）四b八行目、合校三一四（六頁）

（一）「爲」下、經有「其」字。

（二）「天」下、經有「下」字。訓誥・訳文は經に従ふ。

（三）「（卅亥）」經作「駭」。

（四）「雖」下、經有「去」字。

（五）「閭」字、合校云「閭、原作閒。疑形近而譌、今依鈔改。」

（六）「解免」上、經有「其」字。

（七）「一家」上、經有「於此。今但一里有剛強之人、常持一里之正者、一里尚爲其不敢語、後恐恨之得害焉。但一家有剛強武氣之人常持政、尚一家爲其不敢語也」五十九字。

（八）「自中古以來」經作「今太上中古以來」。

（九）「傷深」經作「爲傷甚深」。

（十）「子孫」下、經有「故人民雖見天災怪咎、駭畏其比近所屬、而不敢妄言、爲是獨積久、更相承負。到」三十一字。

（十一）「探」經作「持」。訓誥・訳文は經に従ふ。

（十二）「且」經作「人」。

- (十三) 「害」下、經有「於比近所繫屬者、不敢語言泄事」十三字。
- (十四) 「背」下、經有「與共斷絶、不通」六字。
- (十五) 「神人」經作「神聖一人」。
- (十六) 「據」經作「處」。
- (十七) 「人」經作「雖」。
- (十八) 「進」經作「近」。訓詁・訳文は經に従ふ。

【訓詁】

太平經鈔己部卷之六

今、天下の畏るる所、口閉ざし、爲に敢へて妄譚せず。今、日月星曆は、親しく天の列宿神なるも、尚ほ相畏る。是の故に日出づれば、星輒ち逃匿して、敢へて見はれず、其の威を畏るるなり。夫れ四境の内、厳しき帝王有れば、天下（原文「天」を「天下」に改める）驚（「卜亥」し、京師より大いに遠しと雖も、詔書を畏れ、敢へて語らざるなり。一州界に強き長吏有らば、一州敢へて語らざるなり。一郡に強き長吏有らば、一郡敢へて語らず。一縣に剛強なる長吏有らば、一縣敢へて語らず。一閭亭に亭長の剛強なる有らば、乃ち一亭部 爲に敢へて語らず。此の亭長は、吏の小なる者なり、況んや其の大なる者をや。皆害せらるるを恐れ、各おの解免を取るのみ。善心意有りと雖も、敢へて自ら上に達せず、道をして斷絶せしむ。

一家の尚ほ親しく、自ら血脉を共にし、種類を同じくして生まるるも、乃ち相畏るること此の如し、況んや世を異にするをや（?）。中古より以來、道德を失ひ、反つて多く威武を以て相治め、威もて相迫脅し、聽かざる者有らば、後會ず大いに其の害を得、傷深く、子孫に流る。下古尤も甚し。小しく上書して事を言ひ、自ら帝王に達せんと欲する有らば、比近の其の命を持（原文「探」を「持」に改める）する者、輒ち之を殺す。即時に害傷せざるも、更も相囑託して之を傷害す。故に臣民悉く舌を結び口を杜ざして暗と爲り、愁冤を見ると雖も、上達するを得ず。故に帝王の聰明をして絶たしむ。天變日に多きは、是れ明らかなる證効なり。

今、民は親しく生を父母に得、命を天地に受く。天地を以て父母と爲し、災變善惡を見れば、是れ天地の譚語にして、言ふ所有らんと欲するなり。且つ尚ほ皆 害せらるるを畏れ、乃ち相教勅し、共に皇天后土の言はんと欲するに背く。共に天地を蔽冤して、乃ち辭語をして通ぜず、天地長く悒悒を懷きて達せざらしむ。今帝王は神にして人の源なりと雖も（?）、乃ち百重の内、萬里の外に據る。百重の内、人往きて言を通せんと欲するも、比近（原文「進」を「近」に改める）に迫脅せられ、往きて達するを得ざるなり。

【訳文】

太平經鈔己部卷之六

今、天下では畏れているものに対して、口を閉ざして妄りに語ろうとはしない。今、太陽・月・星は、近い関係にある天の列宿神であるが、それでもなお互いに畏れあっている。それゆえ、太陽が出ると、星はいつも逃げ隠れて、姿を現そうとはしない。太陽の威力を畏れているからである。そもそも国の中に厳しい帝王がいれば、天下は驚き恐れ、たとえ都から非常に遠く離れていても、詔書を畏れ、敢えて語ろうとはしない。一州のうちに強

い長官がいれば、その州の人々は敢えて語ろうとはしない。一郡に強い長官がいれば、その郡の人々は敢えて語ろうとはしない。一県に剛強な長官がいれば、その県の人々は敢えて語ろうとはしない。一亭に剛強な亭長がいれば、その亭の中では、だれも敢えて語ろうとはしない。この亭長というものは、役人のうちのちっぽけなものである。(それでも畏れて語ろうとしないのであるから)ましてや、大きな役人に対してはなおのことである。皆、被害を受けるのを恐れ、それぞれが罪を逃れようとするばかりである。善良な心を持っていたとしても、敢えてみずから上の者の耳に入れようとはせず、(その結果として)道を断絶させてしまうのである。

一家という、近くて同じ血脈を持ち、同類のものとして生まれた者であっても、それでも互いに畏れあっていることはこのようである。ましてや世を異にする場合はなおさらである(?)。中古以来、道徳を失い、かえって多く威武を以て人々を治め、威力によって脅迫し、聴かない者がいれば、その者はのちに必ず大きな害を受け、その傷は深く、子孫にまで流れる。(このような状態は)下古においても甚しい。ちよつとでも上書して事を言い、みずから帝王の耳に入れようとする者がいれば、身近にいてその人の命を握っている者が、たやすくその人を殺してしまう。ただちに傷害しない場合でも、互いに次々と囑託して傷害する。それゆえ、臣民はことごとく口をつぐんでしゃべらなくなり、たとえ、愁いと鬱屈を味わうことはあっても、上書して帝王の耳に入れることはできなくなってしまう。それゆえ、帝王の聡明(目と耳が真実を知ること)を断ち切らせてしまうのである。天の変異が日ごとに多くなっているのは、その明らかな証拠である。

今、民は親しく父母から生を得、天地から命を受けている。天地を父母としていて、(天がくだす)災異変怪とその善悪を見れば、それは天地の言説であり、天地は何か言おうとしている(ことがわかる)。それでもなお、民は皆、殺されることを恐れ、互いに教えあつて、共に天地の神々が言おうとしていることに背く。共に天地の心を覆い隠して恨みを抱かせ、天地の言葉を通じず、天地が長く憂いを抱いたまま、(天地の心が帝王のところ)に達しないようにさせている。今、帝王は神聖で、人の源であるが(?)、百重の奥深い宮殿の中、(民から遠く離れた)万里の外にいる。百重の宮殿の中へ人が行つて、(天地の)言葉を通じさせようとしても、身近にいる者に脅迫されて、通達させることができないのである。

【注】

○妄譚

『太平經』丙部《分別貧富法第四十一》「夫妄談、乃亂天地之正文、不可爲人法。」(合校三三頁)

○日月星曆

『太平經』丁部《知盛衰還年壽法第八十三》「故萬物著於土地迺生、不能著於天、日月星曆反著於天、迺能生光明。」(合校二一〇頁)

『漢書』司馬遷傳「僕之先人、非有剖符丹書之功、文史星曆、近乎卜祝之間、固主上所戲弄、倡優畜之、流俗之所輕也。」

○列宿神

『焦氏易林』卷一「天官列宿、五神共舍。宮闕光堅、君安其居。」

『太平經』己部《來善集三道文書訣一百二十七》「夫列宿者、善正星也、乃流入天之獄。」（合校三—三頁）

○日出、星輒逃匿

『太平經』己部《萬二千國始火始氣訣第一百三十四》「故守善道者、凶路自絕、不教其去而自去。守凶道者、言（善？）路自絕。此猶若日出而星逃、星出而日入、不失銖分。」（合校三七四頁）

○四境之內

『孟子』梁惠王下「四境之內不治，則如之何。」

『太平經』丙部《件古文名書訣第五十五》「四海四境之內、災害都掃地除去、其治洞清明、狀與天地神靈相似。」（合校八七頁）

○驚〔十亥〕

『太平經』丙部《服人以道不以威訣第六十四》「故古者聖賢、乃貴用道與德、仁愛利勝人也。不貴以嚴畏刑罰、驚駭而勝服人也。」（合校一四四頁）

○閭亭

『太平經』戊部《不用大言無效訣第一百一十》「比若閭亭、遠帝王之縣吏、壅閼斷人辭語、不得言變事。」（合校二九七頁）

○亭部

○解免

『韓非子』說疑「為人臣者、有侈用財貨賂以取譽者、有務慶賞賜予以移眾者、……有務解免赦罪獄以事威者、……此五者明君之所疑也、而聖主之所禁也。」

○種類

『太平經』丙部《樂生得天心法第五十四》「其次罪過及家比伍也、願指有罪者、慎毋盡滅煞人種類、迺可也。」（合校八〇頁）

○以威武相治

『韓詩外傳』卷五「秦之時、非禮義、棄詩書、……是以囂頑無禮、而肅敬日益凌遲、以威武相攝、妄為佞人、不避禍患、此其所以難治也。」

○迫脅

『荀子』臣道「事聖君者、有聽從無諫爭。事中君者、有諫爭無諂諛。事暴君者、有補削無撓拂。迫脅於亂時、窮居於暴國、而無所避之、則崇其美、揚其善、違其惡、隱其敗、言其所長、不稱其所短、以為成俗。」

○比近

『孔子家語』六本「孔子曰、行己有六本焉。本立然後為君子也。……比近不安、無務求遠。是故反本脩迹、君子之道也。」

○結舌杜口為暗

『太平經』丙部《大小諫正法第五十九》「臣有忠善誠信而諫正其上也、君不聽用、反欲害之。臣駭因結舌為瘖、六方閉不通。」（合校一〇二頁）

『漢書』杜周傳「天下莫不望風而靡、自尚書近臣皆結舌杜口、骨肉親屬莫不股栗。威權泰盛而不忠信、非所以安國家也。」

○愁冤

『太平經』丙部《起土出書訣第六十一》「人雖小、其冤愁地形狀、使人昭然自知、深有過責、立可見也。」（合校一一八頁）

○明證効

『太平經』丙部《案書明刑德法第六十》「故外悉無物、皆逃於內、是明證効也。」（合校一〇六頁）

『太平經』丁部《興衰由人訣第一百一》「立與天地迺響相應、是其人明効證驗也。」（合校二二三頁）

○教勅

『太平經』丙部《事死不得過生法第四十六》「人由親而生、得長巨焉。見親死去、迺無復還期、其心不能須臾忘。生時日相見、受教勅、出入有可反報。到死不復得相覩、訾念其悒悒、故事之當過其生時也。」（合校四九頁）

○蔽冤天地

○懷悒悒

『大戴禮記』曾子立事「君子博學而孱守之、微言而篤行之、行必先人、言必後人。君子終身守此悒悒。」

『太平經』己部《冤流災求奇方訣第一百三十一》「久苦無明師、而長懷悒悒、而天年將竟也。」（合校三四二頁）

○百重之內、萬里之外

『太平經』己部《作來善宅法第一百二十九》「今帝王乃居百重之內、去其四境萬萬餘里、大遠者多冤結、善惡不得上通達也。奇方殊文異策斷絕、不得到其帝王前、民臣冤結、不得自訟通也。爲此積久、四方蔽塞、賢儒因而伏藏、久懷道德、悒悒而到死亡。帝王不得其奇策異辭以安天下。」（合校三三五頁）

『太平經』己部《作來善宅法第一百二十九》「今帝王雖居百重之內、與民相去萬萬里、光明教令、悉暢達也。」（合校三三六頁）

II

【原文】

夫（一）不得通、天地大怒、賊殺凡物、乃毀天地、大凶之歲、斷（二）無聰明、乃爲大危之國。此罪不可復名、故當絕滅（三）矣。（以上、第一段）

夫大災異變怪者、是天地大譚也。中災異變（四）者、是天地中譚也。小災異變者、是天地小譚也。比（五）人事、大事大言、小事小言。不空見也（六）、而欺人也（七）。夫見大瑞應、天地大喜悅、中瑞應、中喜悅、小瑞應、小喜悅。夫無災無瑞爲平也（八）。（以上、第二段）是故天將興祐帝王、皆令自有意。從古到今、將興祐之、輒爲出奇文異策、可（九）按以理（十）。故爲（十一）者悉大吉。將不祐之也、悉斷奇文異策、使不得見。或得之、又使愚（十二）不知策而用之也。將興行也、使心（十三）曠然開通而受用之。此天祐法（十四）也、不欺人也。凡人將興者多好善、將衰者多好惡也。將吉者易開導、將凶者好抵冒人也。天者常祐善人、道者思歸有德。天不肯祐惡人、道不肯付愚人也。（以上、第三段）

【校勘】

《第一段》經…太平經卷之八十六(己部之一)「來善集三道文書訣一百二十七」(道藏八六・七a一行目)四行目、合校三二八頁)

(一)「夫」經作「天談」。

(二)「斷」上、經有「國」字。

(三)「絕滅」經作「死過」。

《第二段》經…太平經卷之八十六(己部之一)「來善集三道文書訣一百二十七」(道藏八六・一三a二行目)一三b二行目、合校三二三頁)

(四)「變」下、經有「怪」字。

(五)「比」下、經有「若」字。

(六)「不空見也」上、經有「此大小、皆有可言也」八字。

(七)「而欺人也」、經作「天地不妄欺人也」。訓読・訳文は「欺」の上に「不」を補ふ。

(八)「夫無災無瑞爲平也」、經作「平平無善變、亦無惡變、是其平平」。

《第三段》經…太平經卷之八十六(己部之一)「來善集三道文書訣一百二十七」(道藏八六・一五a三行目)一五b三行目、合校三二五頁)

(九)「可」下、經有「令」字。

(十)「理」經作「治」。

(十一)「爲」上、經有「所」字。

(十二)「愚」上、經有「其心」二字。

(十三)「心」上、經有「其」字。

(十四)「祐法」經作「格法」。

【訓読】

夫れ通ずるを得ざれば、天地大いに怒り、凡物を賊殺して、乃ち天地を毀ち、大凶の歳たり。斷たれて聰明無ければ、乃ち大危の國と爲る。此の罪、復た名づく可からず、故に當に絶滅すべし。(以上、第一段)

夫れ大災異變怪は、是れ天地の大譚なり。中災異變は、是れ天地の中譚なり。小災異變は、是れ天地の小譚なり。人事の、大事は大言し、小事は小言するに比す。空しく見れざるなり、人を欺かざるなり(原文「欺人」を「不欺人」に改める)。夫れ大瑞應を見れば、天地大いに喜悦す。中瑞應は中ば喜悦し、小瑞應は小しく喜悦す。夫れ災無く瑞無きを平と爲すなり。(以上、第二段)

是の故に、天將に帝王を興祐せんとすれば、皆自ら意有らしむ。古従り今に到るまで、將に之を興祐せんとすれば、輒ち爲に奇文異策を出し、按じて以て理む可し。故に爲すことは悉く大吉なり。將に之を祐げざらんとするや、悉く奇文異策を斷ち、見るを得ざらしむ。或いは之を得るも、又 愚にして、策して之を用いるを知らざらしむ。將に興行せんとするや、心をして曠然開通して之を受用せしむ。此れ天の祐くる法なり、人を欺かざるなり。凡そ人將に興らんとする者は多く善を好み、將に衰へんとする者は多く惡を好むなり。將に吉ならんとする者は開導し易く、將に凶ならんとする者は好んで人を抵冒するなり。天は常に善人を祐け、道は有徳に歸せんことを思ふ。天は惡人を祐くるを肯んぜず、道は愚人に付するを肯んぜざるなり。(以上、第三段)

【訳文】

そもそも（天地の言葉を帝王のところに）通じることができなければ、天地は大いに怒って万物を殺傷し、その結果、天地はそこなわれ、大凶の年となる。帝王への言葉が断たれて、帝王の聡明がなくなれば、大いに危うい国となってしまふ。この罪は、もはや名づけようがないほど大きい。それゆえ、絶滅してしまふことになるのである。（以上、第一段）

そもそも大きな災異変怪は、天地の大きな言説である。中程度の災異変怪は、天地の程度の言説である。小さな災異変怪は、天地の小さな言説である。それはちょうど人間世界の事柄で、大きな事は大きく語り、小さな事は小さく語るようなものである。（災異変怪は）何の根拠もなく現れることはないし、人を欺くことはない。そもそも大きな瑞応を見れば、それは天地が大いに喜んでいふということである。中程度の瑞応は中程度に喜び、小さな瑞応は少しだけ喜んでいふ。そもそも、災異変怪もなく瑞応もない状態を、「平」といふのである。（以上、第二段）

それゆえ天が帝王を助けようとする時には、いつも帝王自らがその意志を持つようにさせる。古から今に至るまで、帝王を助けようとする時には、いつも帝王のために奇文異策を世に出し、帝王がそれをよく調べて統治できるようにする。だから、その帝王が行うことは、ことごとく順調で大吉となる。（逆に）天が帝王を助けようとしないうちは、奇文異策をすべて断絶し、見るべきできないようにする。もしも（奇文異策を）得ることがあつても、（その心が）愚かであつて、策で将来を予測して（？）それを用いることを知らないようにさせる。天が助けを行おうとする時には、帝王の心が広々としてからりと開け、（天が出した奇文異策を）受けて用いるようにさせる。これが、天が助ける方法であり、人を欺くということはないのである。およそ、今から興隆しようとする者は、多くの場合善を好み、衰えようとする者は、多くの場合悪を好む。吉事が起ころうとしている者は導きやすく、凶事が起ころうとしている者は、他者を押しつけ悪事を犯しがちである。天は常に善人を助け、道は徳ある者の所に帰着しようと思つていふ。天は決して悪人を助けることはせず、道は決して悪人に付託することはしないのである。（以上、第三段）

【注】

○天地大怒

『太平經』庚部《四吉四凶訣第一百七十八》「凡害氣動起、不可禁止、前後不理、更相承負、**天地大怒**、羣神戰鬪。」（合校五二二頁）

○賊殺凡物

『墨子』魯問「子墨子曰、并國覆軍、**賊殺百姓**、孰將受其不祥。」

○大凶之歲

『太平經』己部《署置官得失訣第一百六十一》「夫天地極神且明、尚不敢奪人所欲爲、奪之則爲**大凶歲**也。」（合校四五二頁）

○大危之國

『呂氏春秋』仲春紀・情欲「巧佞之近、端直之遠、**國家大危**、悔前之過、猶不可反。」

○災異變怪

『春秋繁露』必仁且智「天地之物有不常之**變者**、謂之**異**、小者謂之**災**。災常先至而異乃隨

之。災者、天之譴也。異者、天之威也。譴之而不知、乃畏之以威。詩云畏天之威、殆此謂也。凡災異之本、盡生於國家之失。國家之失乃始萌芽、而天出災害以譴告之。譴告之而不知變、乃見**怪異**以驚駭之。驚駭之尚不知畏恐、其殃咎乃至。以此見天意之仁而不欲陷人也。」
『論衡』譴告「夫國之有**災異**也、猶家人之有**變怪**也。有災異、謂天譴人君。有變怪、天復譴告家人乎。」

○大災異變怪、小災異變

『太平經』丙部《大小諫正法第五十九》「天者、小諫變色、大諫天動裂其身、諫而不從、因而消亡矣。……」（合校九八頁）

○大譚、小譚

『太平經』丁部《分別四治法第七十九》「若今使陰陽逆闕、錯亂相干、更相賊傷、萬物不得處其所、日月無善明、列星亂行、則天有疾病、**悒悒**不解、不傳其言、則病不愈。故亂則談、小亂**小談**、大亂**大談**。」（合校二〇〇頁）

○大事大言、小事小言

『禮記』表記「昔三代明王皆事天地之神明、無非卜筮之用、……**大事**有時日、**小事**無時日、有筮。」

『莊子』齊物論「大知閑閑、小知閒閒。**大言炎炎、小言詹詹**。」

○大瑞應、小瑞應

『論衡』是應「夫儒者之言、有溢美過實。**瑞應**之物、或有或無。夫言鳳皇騏驎之屬、**大瑞**較然、不得增飾。其**小瑞**微應、恐多非是。」

○天地大喜悅

『太平經』庚部《某訣第二百四》「相樂者、則**天地長喜悅**、不戰怒。不戰怒、則災害姦邪凶惡之屬悉絕去矣。」（合校六三〇頁）

○夫無災無瑞爲平也

『太平經』丙部《四行本末訣第五十八》「天下之萬物人民、不入於善、必陷於惡、不善不惡爲**平平**之行、壹善壹惡爲詐僞行、無可立也、平平之行無可勸、大善與大惡有成名。」（合校九四頁）

○興祐

○奇文異策

『後漢書』方術列傳上「及光武尤信讖言、士之赴趣時宜者、皆騁馳穿鑿、爭談之也。……自是習爲內學、尚**奇文**、貴異數、不乏於時矣。」

『鹽鐵論』卷五·利義「詳延有道之士、將欲觀殊議**異策**、虛心傾耳以聽、庶幾云得。」

『太平經』己部《作來善宅法第一百二十九》「今不知當以何來、致此**奇方殊策**善字、迺悉得之。」（合校三三二頁）

○使愚不知策而用之

『太平經』己部《作來善宅法第一百二十九》「神祇往來、樂**大賢策**之、使四方八極遠境聰明悉來至也。」（合校三三六頁）

○興行

『孝經』三才「先王見教之可以化民也。是故先之以博愛、而民莫遺其親、陳之德義、而民興行。」

『太平經』庚部《樂怒吉凶訣第一百九十一》「夫緩與樂者、上屬天也。急與怒刑者、下屬地。興行其上者萬事理、興行其下者萬事亂。」（合校五八九頁）

○曠然開通

『淮南子』泰族訓「夫觀六藝之廣崇、窮道德之淵深、達乎無上、至乎無下、…崇於太山、富於江河、曠然而通、昭然而明。」

○天祐法

『易』繫辭傳上「君子居則觀其象而玩其辭、動則觀其變而玩其占。是以自天祐之、吉无不利。」

○抵冒

『漢書』禮樂志「自古以來、未嘗以亂濟亂、大敗天下如秦者也。習俗薄惡、民人抵冒。」

○天者常祐善人

『老子』第七十九章「天道無親、常與善人。」

○道者思歸有德

『史記』樂書「歌詩曰、天馬來兮從西極、經萬里兮歸有德。」

『太平經』己部《洞極上平氣無蟲重複字訣第一百三十六》「道歸于德君、付于賢良。」（合校三八一頁）

○道不肯付愚人

『太平經』丙部《道無價却夷狄法第六十二》「天地之運、各自有歷、今且案其時運而出之、使可常行、而家國大吉、不危亡。所以不付小人而付帝王者、帝王其歷、常與天地同心、乃能行此、小人不能行。故屬君子、令付其人也。」（合校一三〇頁）

III

【原文】

天符還精以丹書、書以入腹、當見腹中之文、大吉、百邪去矣。五官五王爲道初、爲神祖。審能閉之閉門戶、外闔內明、何不洞觀。守之積久、天醫自下、百病悉除、因得老壽。愚者捐去、賢者以爲重寶。此可謂長存之道。獨貴自然、形神相守。此兩者同相抱、其有奇思反爲咎。子失自然、不可壽也。嬰兒五精、還自保也。

【校勘】

經…太平經卷之八十七（己部之二）「長存符圖第一百二十八」（道藏闕、合校三三〇頁。合校云、「鈔佚題目、今據敦煌出太平經目錄補。」）

【訓読】

天符還精、丹を以て書く。書きて以て腹に入れ、腹中の文を見るに當たりて大吉、百邪去る。五官五王は道の初め爲り、神の祖爲り。審らかに能く之を閉ざし、門戸を閉ざせば、外は闔く内は明らかにして、何ぞ洞觀せざらん。之を守ること久しきを積めば、天醫自ら下り、百病悉く除かれ、因りて老壽を得。愚者は捐て去り、賢者は以て重寶と爲す。此れ長存の道と謂う可し。獨り自然を貴び、形神相守る。此の兩者は共に相抱き、其の奇思有るは反つて咎と爲る。子 自然を失えば、壽なる可からず。嬰兒の五精、還りて自ら保つなり。

【訳文】

天符を用いて精を還すには、（まず）丹で符を書く。書いたものを（飲み込んで）腹に入

れ、腹の中の文字を見ることができると大吉で、諸々の邪気は去る。鼻・目・口・舌・耳の五官と五王(?)は、道の初めであり、神の祖である。周到に五官を閉ざし、(外界からの)門戸を閉ざすことができれば、身体の外側は暗く内側は明るくなり、どうして(体内の)あらゆるものを見通すことができないことがあるのか。これを長く続けていると、天医が自然に降りてきて、諸々の病はすべて除かれ、その結果、長寿が得られるのである。愚かな者は捨て去ってしまうが、賢者はこれを大切な宝と考える。これこそ長存の道と言うべきものである。ただひとり自然を尊び、形(身体)と神(精神、体内神)が互いに守りあう。この両者(形と神)はともに抱きあっており、(自然ではない)変わった考えを持つことはかえって禍となる。あなたは自然の状態を失えば、長生きすることはできない。嬰兒の時の五臓の精気の状態に還って、自分自身を保つのである。

【注】

○天符

『道教靈驗記』(『雲笈七籤』卷二二〇)「使者一人曰、昨奉天符、以修齋之力、母生天堂。」

○還精、以丹書、見腹中之文

『太平經』己部《洞極上平氣無蟲重複字訣第一百三十六》「以丹爲字、…：以善酒如清水已飲、隨思其字、終古以爲事。…：善氣至、病爲其除去、面目益潤澤。或見其字、隨病所居而思之。名爲還精養形。」(合校三八〇頁)

『抱朴子』對俗「仙經曰、服丹守一、與天相畢、還精胎息、延壽無極。此皆至道要言也。」

○五官五王
『靈樞』五閱五使「黃帝曰、願聞五官。歧伯曰、鼻者肺之官也、目者肝之官也、口唇者脾之官也、舌者心之官也、耳者腎之官也。」

『太平經』戊部《闕題》「入室思存、五官轉移、隨陰陽孟仲季爲兄弟、應氣而動、順四時五行天道變化以爲常矣。」(合校三〇九頁)

『靈寶五符序』卷上「人頭圓象天、足方法地、髮爲星辰、目爲日月、…：五臟法五行、亦爲五帝、亦爲五曹、上爲五星、下爲五嶽、內爲五王、外爲五德、升爲五雲、化爲五龍。」

*『素問』陰陽應象大論篇「肝主目、…：心主舌、…：脾主口、…：肺主鼻、…：腎主耳。」

*『素問』宣明五氣「藏所主、心主脈、肺主皮、肝主筋、脾主肉、腎主骨、是謂五主。」

○外聞内明、何不洞觀

『太平經鈔』乙部《闕題》「故天地不語而長存、其治獨神、神靈不語而長仙、皆以内明而外聞、故爲萬道之端。」(合校二六頁)

『太平經』庚部《三者爲一家陽火數五訣第二百一十二》「萬事之始、從赤心起。心者洞照知事、陽始於陰中、亦洞照。故水者、外暗内明而洞照也。」(合校六七九頁)

○積久

『太平經』戊部《眞道九首得失文訣第一百七》「身中照白、上下若玉、無有瑕也。爲之積久久、亦度世之術也。」(合校二八二頁)

○天醫

『赤松子章曆』「右十二月天醫所在。若欲收擊治病、常從天醫上來、大吉。」

○老壽

『列仙傳』「呼子先者、漢中關下卜師也。老壽百餘歲、臨去、呼酒家老嫗曰：…」

『太平經』己部《冤流災求奇方訣第一百三十一》「故多得老壽、或得度世。」（合校三四二頁）

○以爲重寶

『太平經』丙部《諸樂古文是非訣第七十七》「吾書乃爲仁賢生、往付有德、有德得之、以爲重寶。」（合校一八四頁）

○長存之道

『太清中黃真經』（『雲笈七籤』卷一三）「長存之道章第六 長存之道因專志」

○獨貴自然

『老子』第二十章「我獨異於人而貴食母」河上公注「食、用也。母、道也。我獨貴用道也。」

『太平經』庚部《虛無無爲自然圖道畢成誠第一百六十八》「天地之性、獨貴自然、各順其事、毋敢逆焉。」（合校四七二頁）

○形神相守

『抱朴子』極言「由茲以觀、則人之無道、體已素病、因風寒暑濕者以發之耳。苟能令正氣不衰、形神相衛、莫能傷也。」

○奇思

○失自然

『老子』第十七章「猶兮其貴言」河上公注「舉事猶猶、貴重於言、恐離道失自然也。」

『太平經』庚部《虛無無爲自然圖道畢成誠第一百六十八》「凡萬物生自有神、千八百息人爲尊、故可不死而長仙、所以蚤終失自然、禽獸尚度況人焉。」（合校四七二頁）

○嬰兒五精

『老子』第十章「專氣致柔、能嬰兒乎。」

『太平經』戊部《齋戒思神救死訣第一百九》「四時五行之氣來入人腹中、爲人五藏精神。」（合校二九二頁）

『靈樞』九鍼論「五并、精氣并肝則憂、并心則喜、并肺則悲、并腎則恐、并脾則畏、是謂五精之氣、并於藏也。」

『無上秘要』卷九七《迴神飛霄登空招五星上法》「五星纏絡、光流內明、二景飛霞、灌溉五精。眞神填藏、長保黃寧、太一務猷、變胎迴嬰。肝肺結華、心腎充盈、脾保中元、五芝受生。日月寶光、與帝合并、飛空騰虛、上朝玉清。」

◎參考

『太上三十六部尊經』（道藏第一八〇一九冊）上清境經下《上清境鍊生經第七》

「若復有人能修持上道、敬奉師尊、傳受經法、還復精氣、灌注身田、以丹砂書秘篆靈符、吞服入其腹中、當見腹中之文、大吉、百邪皆去。五官爲主、爲道之初、爲神之祖、……門戶出入、邪氣自散、眞道流行、內外洞明。守之積久、天醫自下、百病悉能消除、因得老壽。愚者不知、自然捐去。妙法雖遇、宿善亦變爲凶。賢者以爲重寶、尊重敬奉。此可謂長存之道也、獨貴自然、形神俱妙、體相常樂。守此神氣、性命自得、逍遙道果、昇入金門。若不知其秘要、抱其有奇思、反爲咎、則失自然、不可得長生之道也。汝今若欲依前修持、不若先養其母、後愛嬰兒五精。皆朝泥丸、還元復命、自得保守、無復虧損、乃可精修行業、出入華房、……」

*『道藏提要（第三次修訂）』云、「太上三十六部尊經……此書當成於唐初或更早。」